



二月、 松明調整



2月11日、極楽寺（赤目町一ノ井）所有の松明山から樹齢100年を超える檜を切り出し。名張高校の生徒も応援に駆けつけました。檜は、昔からの規格に合わせて丁寧に調整されます。



伊賀一ノ井松明調進
歴史を繋いで

777年



関西に春を呼ぶ東大寺二月堂の修二会（お水取り）。3月12日～14日の深夜には「達陀」の行法が繰り広げられ、堂内では煩惱を焼き尽くす松明が燃え盛ります。この松明は、古来より赤目町一ノ井から調進されています。

東大寺の文書によると、黒田庄領主の任にあった聖玄という僧が、1249年に一ノ井の私田を寄進したのが始まりとされ、今年で777年目。地元には、「道観長者」という伊賀の国一番のお金持ちが、晩年に「松明を毎年、修二会に納めるように」と遺言したという伝承も残ります。

現在、地域住民で構成される「伊賀一ノ井松明講」を中心に、「春を呼ぶ会」など多くの人たちの協力を得ながら、この伝統が引き継がれています。



3月10日、道観塚で道中の安全を祈願。3月12日、極楽寺を出発し、臨時電車で一路奈良へ。一般参加者も調進を体験



三月、 東大寺へ



午前11時ごろ、二月堂に上堂。奉納の議を受け、今年も無事、松明木が納められました。「松明は重いけれど、歴史はもっと重い。伝統を担うことは大きな誇り」と講長の森本芳文さん。松明木は1年間乾燥され、翌年のお水取りで用いられます。